

## 平成26年度 第2回愛知県生涯学習審議会会議録

### 1 開催期日

平成27年2月24日（月）13時58分から15時35分まで

### 2 場 所

愛知県議会議事堂ラウンジ

### 3 出席した委員の氏名 15名

足立誠、安藤正紀、大島伸一、小山たすく、加来正晴、木本文平、後藤澄江、志村貴子、鈴木照美、西山妙子、服部重昭、牧野秀泰、松田武雄、山内晴雄、吉川佳代

### 4 欠席した委員の氏名 3名

恩田やす恵、加藤夕紀、林寛子

### 5 会議に付した事項

#### 議 題

- (1) 超高齢社会に対応した生涯学習の在り方について
- (2) 平成27年度愛知県生涯学習推進計画事業（案）について

### 6 会議の経過

- 会議録署名人の指名  
会長から安藤委員と鈴木委員を署名人に指名
- 専門委員の選出  
会長から後藤委員、山内委員、牧野委員、吉川委員を専門委員に指名
- 超高齢社会に対応した生涯学習の在り方について  
事務局から説明、質疑応答は別紙のとおり
- 平成27年度愛知県生涯学習推進計画事業（案）について  
事務局から説明

## 【超高齢社会に対応した生涯学習の在り方について】

### 【資料1について】

#### 〈各委員の意見要旨〉

- アンケートの「世代間交流の参加意向について」という部分で、具体的な例がないと、果たして世代間交流の参加意向というものが何を言っているのかがわからない。たとえば、こんなことが世代間交流の活動であるというようなことが書かれていると分かりやすいと思う。
- アンケートにあるような交流の場に出たくないという人は、何があったら、何をしてもらえたら、自分が参加するのに障害となっているものが消えて、参加する気になるのか。自分の心のストッパーになっている部分が除かれれば、参加についてのその後の展開が変わってくると思うが、そのようなことを上手に拾える設問はないのだろうか。
- 資料1-1の表6について、地域活動に参加したものがある、が自分の予想よりもかなり多くなっている。これが愛知県の一般的な像だとすると、やっていない人は非常に少なく、病気とか家庭の事情などやむを得ない事情で外に出られない人を除けば、ほとんどの人が何かをやっているということになるが、この数値はそういうものなのか。
- 資料1-1について、地域活動といった時に、最近は幼稚園、保育園や学校に対していろいろな支援をしてくれる高齢者が増えているが、学校に入って、学びをサポートするとか、ふれあいや環境整備をするとか、そうした学校を支援する活動はここに入っているのか。
- アンケートについて、「どのような学習活動」という場合には、まずは、健康づくりやスポーツ、音楽、芸術のような学習活動の内容について聞いた上で、そのような学習活動を行うために、たとえば地方公共団体とかカルチャーセンターに行くということに繋がっていくのではないか。
- 問5の選択肢の最後で「そのような活動には参加したくない」とあるが、その理由を聞くべきではないか。その後の問6も問7も問11も、活動に参加したくないのはなぜか、という理由が明確になれば、この課題に対する対応も見えてくるのではないか。
- 中身について、年代なども含めて少し整理が必要ではないかと思う。同じように仕事、家事が忙しいにしても20代と60代とではまったくその中身が異なると思う。どうすれば参加ができるのかということについても、年代によって大きな違いがあるのではないかと思うので、そのあたりまでもう一步踏み込んだ方が良いのではないか。
- アンケートは目的があって行うものであると思うが、問2は何を聞きたいのかがよく分からない。実際に高齢者の方にこのことを聞いても状況は変えられるものではないと思う。選択肢④や⑤を聞いても、現実は変わっていかない。ここで聞いて、

それをどうしていくのかが見えてこない。

- 生涯学習ということで、なぜ参加しないのかという理由はいろいろあると思うが、そもそも生涯学習というものに何を求めているのかという視点も必要なのではないか。参加している人がたくさんいるということは、そこに求めているものが合致するから参加しているということであり、そうした部分を伸ばしていくことが大切である。
- 生涯学習のアンケートの中身について、自分の趣味のような活動も入っていれば、防災活動のような地域に対する活動も入っており、性格が異なるものが混在している。ここについては、分けて考えないと、なぜ参加しないのか、参加するメリットについて、個人の楽しみ、生きがいという部分と地域のためという趣が異なる部分があり、聞き方として分けて考えた方がより実態や考え方が正確に出るのではないか。
- 社会のためになるという視点ではなくて、そもそも社会参加そのものが、高齢者にとってどんなことなのか、超高齢社会と言っても、対象は高齢者ばかりではないが、超高齢社会というキーワードを持ってくると、高齢者にとってどうなのかということは、どうしても気になるところである。
- たとえば認知症について、高齢者が社会との接点をきちりと持っているほど認知症にはなりにくい。高齢者が元気で毎日を生き生きと暮らしていくことを維持していくうえで、社会参加というものが非常に意義があるということは、高齢化の問題を考えていくうえで、はっきりとしたエビデンスがある。その前提のもとで、強制的に参加した場合に高齢者の元気が維持されるのかどうかも気になるところである。
- 若い人にとって、意欲的に、積極的に、自主的に社会参加することによって、若い人がどのように変容するのか、若い人にとってどのような意味があるのか、いわゆる社会参加の意味について、現状でエビデンスとして分かっていることと、分かっていることがないことがある中で、全体としてどのように考えていくのか。
- 社会参加が善であるということは一般的に言われていることであるが、人によっては、必ずしも社会参加が善であるとは限らないということも言えると思われる。たとえば、社会参加はできないが、特定の人との関係づくり、人と人との関わりができるということが、その人にとっての自己実現に繋がっていく、社会参加はしないが、何らかの形で、どこかで人との繋がりができている、人との繋がりを支援するということが大事である。
- 全体として事務局からの説明は社会参加が良いことであるという前提のもので、だいたい調査を行う時には、そのような前提で行うものだが、完全にそれによってしまうと誤ることがある。
- 高齢者への強制的な地域参加をどう考えるかという点について、強制的にされることによって、もう地域に参加するのは嫌だと思う人もいれば、反対に強制的であっても、自治会の役員をさせられたことを通じて、人との関わりが増えて自身の自

己実現に繋がったということは自分の行ったいろいろな調査でもエビデンスとして実証されている。ある一定の枠組みを作って、そこに参加してもらおうということの意味も十分にあるということはしっかり押さえなくてはいけないし、一方で社会参加がすべて善であるということ的前提にして考えるということに対しては、必ずしもそうではないということもあり得るということ念頭に置いておく必要がある。

- ただいまの意見は、社会との何らかの接点が重要であるが、その在り方を間違えると逆効果になってしまうということがあるということ念頭においておく必要があるという意見だと思う。
- 政策としては、どうしてもマスがどう動いていくかということ念頭においたものにならざるを得ないのであるが、そこからこぼれた人をどうするのかということについて、無視すれば良いということはなく、特に教育ということであると、そのあたりのきめ細かさというものは相当重要になってくると思う。
- 個人の生活の充実ということで、自分の趣味や学びを通して生きがいを感じるということは結構なことであるが、社会づくり、地域づくりというものが非常に求められていると思う。そのための生涯学習という面もあると思う。
- 資料1-1表11の地域活動に参加していない理由について、若い世代で「関心がない」や「面倒くさい」が多くなっていることが気にかかる。このあたりに地域社会における活動の意義に目を向けて欲しいと思う。
- 高齢の人はケアしてもらおうという方向にどうしても話が行ってしまいがちであるが、むしろこの人たちがどう生きがいを持ちながら、社会に貢献していくことができるのか、そのための道はないのか探していきたい。
- アンケートの実施方法について、若い人たちの意見を聞くことはできるのか。部分的にでも良いので、参考として若い人たちの意見を聞く計画はあるのか。
- 超高齢社会といっても、高齢者にとってだけ良い社会であり得るはずがなく、全世代がよい社会だと感じられる社会を形成していかなければならないが、世代間のギャップ、意識のギャップは相当大きなものになっていると思う。このギャップをどう考えていくか、正面から逃げずにこの問題をどう考えていくかということが極めて重要ではないか。
- 愛知県という限られたなかでも、地域によって非常に大きな差がある。高齢化率、文化度などかなり違っている。名古屋市を中心と北設地域で同じであるはずがない。この地域間の格差をどのように考えていくか。社会参加という言葉は一つだが、地域によって参加の仕方には相当のバリエーションがある。これを県としてどうやってまとめていくか、この差をどう考えていくのかも非常に大きな問題である。

【資料2について】

- 要望であるが、ユネスコスクールにおいて、公民館や NPO との連携というものを  
作って、取組を進めていただきたい。せっかくユネスコスクール活性化への取組と  
いうことなので、ぜひ公民館と手を組んでやっていただきたい。

【最後に】

- 地域ごとの状況はあまりにも違い過ぎる。文化や高齢化率など、いろいろな条件  
が異なるなかで、一律に物事を考えていくという方法に、明らかに限界が見えて来  
ている。しかし、世界中でどこも経験したことがない社会に日本が一番初めに突入  
しており、その中でいかに良い超高齢社会を創りあげていくのかということは、日  
本国民にとっても最大の課題であるし、一つのモデルとして世界に発信していくこ  
ともなる。
- ある一定のものの考え方、社会との接点なしに、つまり高齢者の居場所なしに良  
い超高齢社会というものはあり得ないし、世代間がきちんとした形で交流できると  
いうようなことなしにも良い超高齢社会はあり得ないと思う。しかし、相当きめ細  
かい対応が必要で一律に線を引くということでは、片が付かないということも全体  
の意見かと思う。地域で考え、地域ごとにプログラムを作って、地域ごとにシナリ  
オを作って、答えを出していくという形でしか地域の再生はあり得ない。やはり教  
育についても同じことかとあらためて感じた。専門部会が開かれるので、そのあた  
りのことも含めて、きめ細かく議論をしていただきたい。